

宝達山から昇る朝日に、日一日と春を感じる今日、三十八名の生徒諸君に卒業証書を渡しました。卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日、この良き日に当たり、宝達志水町町長 寶達典久様、本校PTA会長 岡田悦充様、同窓会会長 守田幸則様のご臨席を賜り、石川県立宝達高等学校第五十回卒業証書授与式を保護者と在校生が一堂に会し挙行できますこと、誠に喜びに耐えません。長期にわたり継続して頂いた感染症対策の御協力に心より感謝いたします。

この3年間は、新型コロナウイルスの影響により、学校内部での活動縮小だけでなく、学校外部での活動やイベントの中止、出店縮小、飲食の禁止、さらには、ボランティア参加も極めて少なくなりました。様々な制約の中で予定を変更し、やれる事を考え抜く日々の連続でした。特に、今年度の卒業生は入学式後すぐ、二ヶ月に及ぶ休校があり、入学直後に同級生と直接コミュニケーションができる機会が作れませんでした。さらに、部活の県大会や発表の場が中止となり、我慢ばかりで、楽しみがなく、つらい時期も少なくなかったと思います。

しかしそんな時であっても、共に苦しみ、考えてくれた仲間や教員がいたことを忘れないでください。

さて、このように対外的な行事が出来ない中ではありましたが、昨年十月末に本校の創立五十周年記念式典が挙行されました。3年生が中心となり、学校関係者と在校生が一丸となり、本当に立派にやり遂げることが出来ました。また、準備の段階から同窓会や地域の方々から応援されている宝達高校を強く感じる事ができ、本当に心強く、さらに、大いに助けられました。特に、前日の祝賀花火は、とても素晴らしく、生徒と共に元気や勇気を感じることができた瞬間は、今でも鮮やかに思い出せます。改めて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

では、ここで五十周年を経験した卒業生に改めて問います。創立時に創られた本校の校訓「誠実であれ」とはどのような意味があり、これから宝達高校で過ごし、卒業していく生徒達にどのようになって欲しいという、願いが込められていたのでしょうか。五十年という月日を経て、今現在も刻々と変化し続ける社会において、その各時代における誠実さがあり、その時代を生き抜いた一人ひとりにとっての誠実さとは、当然一つではありません。そして、一つの時代も誠実さを貫き通す事は簡単ではないことは想像できます。実践しても、相手に伝わらない経験もする事でしょう。では、どうして校訓を「誠実であれ」としたのでしょうか。それは、働く原点を考えなくてはなりません。例えば、おいしい食事を提供する。または、ものづくりをする。または、特産品を販売する。どのような仕事も、関わった人たちの幸せを感じてこそ、働き甲斐となるのです。それらすべての土台になる力こそ「誠実さ」であると教えてくれているのではないのでしょうか。言い換えると、誠実さが不完全な土台の上には、どのような幸せも築けないことを伝えているのです。ぜひ、卒業後も、時々問い直す場面を創っていくべき言葉であると、心に刻んでいただけたら幸いです。

さて、宝達高校で過ごした3年間には、たくさんの思い出がある事でしょう。その中で、行事や部活動で頑張っている先輩や同級生、時には下級生と共に、いつの間にか応援している自分がいた事を思い出してください。また、様々なメディアを通じてスポーツやオリンピック、または将棋などを通じて、いつの間にか純粋に応援している自分がいた場面を思い出して下さい。その経験を活かし、次に目指すのは、自分自身を心から応援できる精神面での成長です。失敗をしても踏みとどまり、自分自身を励ますことができるなら、再び挑戦し、強い精神力を発揮できる人間になっていきます。その原動力として、宝達高校の卒業生に対して、同窓会・地域・在校生、そして、本日ここにご参集いただいた保護者の皆さんの応援があることを忘れず、4月からの新しい生活を一步ずつ確実に歩んで頂きたいと強く願っています。

最後になりましたが、PTA母親委員会の皆様には、文化祭での模擬店の出店中止後に、急遽ハンドジェルと励ましのメッセージを作成して頂きました。その暖かいお気持ちを確かに受け取りました。本当にありがとうございました。また、卒業生にとって本日がマスクをしなくても良い初日になりました。今後は各自の判断で行動する事も多くなりますが、皆さんが変化し続ける社会の中で、自立した成人として、逞しく心豊かに生き抜いていくことを祈念して式辞といたします。

令和5年3月1日 校長 金岡 利宏